



マスターコレクション

ショートショート 俺の嫁

水島一輝

朝、目覚まし時計が鳴る。条件反射で音の発信源のスイッチを切って、あと五分だけと心の中で自分と約束する。

「は——い、起きて下さい！ マスター！ 朝ですよ！」

今時の明るい学生服を着たエナの高らかなその声は、どんな目覚ましよりも効果的だった。彼女に起こしてもらえる夢のシチュエーション。そして、待ってましたと言わんばかりに布団をひっぺ返された。マスターは抱きかかえていた抱き枕を離して、目をこすっていると、

「昨夜言われた通り、マスターご所望の女子高生の制服ですよ。どうですか、マスター」

エナは少し照れながらスカートの裾を持って広げて見せた。

「ああ、眩しすぎるよ。太陽なんかよりもエナが俺を魅了するその光が」

「もちろん、マスターだけに向けていますから。さあ、午前中はお部屋のお掃除しますよ。そして、午後はマスターとモフモフタイムです！」

「その絶対領域、触ってもいいですか？」

マスターは、スカートとニーソックスに露出制限を許された太ももをジッと見つめ、そこへゆっくりと手が伸びる。

「ここは何人も侵すことのできない聖なる領域なのでダメですっ！」

理想の起こされ方をしたマスターとエナは軽い朝食をとり、掃除に取りかかる。エナには劣るが、それでも太陽燦々のベランダに洗濯物と布団、そして抱き枕をいっきに干した。

「グヘー、動きづらいです」

エナがもぞもぞしていると思ったら、タコのような宇宙人ばりの触手を生やした衣装で掃除を始めようとしていた。

「なんでそれにドレスチェンジしたんだよ。もうどの触手も埃だらけじゃん。引きずってあちこち歩いただろ。掃除の意味ないだろ。あとでこの埃を取るのか……」

「ごめんなさいい〜。でも、飾り棚やアクリルケースの埃を拭き取るには便利でして」

「面倒を増やしやがって」

「ごめんなさいい〜、ごめんなさいい〜」

タコ宇宙人がペコペコ頭を上下させると、触手が踊る。

「でも、棚を掃除してくれてありがとうな」

マスターはエナの——宇宙人のかぶり物をした——頭をなでた。

エナがドレスチェンジするたびに些細なことだが何かが起こる。それはそれで俺は楽しいんだ。結局、エナにはドレスチェンジしてもらい、埃だらけになった触手の埃取りをさせた。なぜか、ピンク色の名探偵風だ。さすがに虫眼鏡を覗きながら埃を取ってはいなかった。そんな様子を傍目にマスターは掃除を続けていた。

部屋の隅々までに新しい空気が行き渡り、昼食を迎えた。エナが威勢良く、私に任せてと言うので、出来上がるのを待っていた。時々、台所から何やらブツブツと、そして甲高い不気味な笑い声がする。湯気を上げた大きな器を持って台所から出て来たエナは、黒いローブ姿で老年の魔女を彷彿とさせた。

「ヒヒヒ……。さあ、マスター。お食べ」

エナはわざと、しわがれた声で悪魔女を演じている。

「いや、さすがにその格好で言われると食欲なくすよ。普通であるはずのラーメンだけど、何が煮込まれているのか想像しちゃうな」

当たり障りのないもので作られているはずのラーメンなのは分かっているが、だ。

「できれば、違う魔女に魔法をかけてもらいたい」

マスターがそう言うと、エナはにたりと笑みを浮かべ、すぐにドレスチェンジをした。そして、ハートの付いたステッキをくるくる回して、

「キュルキュルチュルチュルパナテナホップルンパ！　おいしいラーメンにな～れ！」

魔女っ娘エナは、ラーメンに魔法をかけた。しかし、その魔法にかかったのはラーメンではなく、マスター自身だった。悪魔女を忘れさせるほど若々しく、幼さすら感じるハートウォーマーな衣装で立ち振る舞うエナに俺の心の鼓動は高まるばかりだ。そんな魔法をかけられた状態で食べるラーメンは胃と心を十二分に満たしてくれた。

マスターが水を頼むと、すぐにエナは立ち去った。しかし、すぐには水を持って来てくれない。自分で水を入れに行った方が早いくらいだ。

「お待たせいたしました。聖なる泉より運んで参りましたお水です」

エナはキラキラと自ら光を発するような透明感のある水の妖精にドレスアップし、落ちついた口調で水を運んで来た。

「ありがたく、いただきます」

わざわざ水一杯のためにドレスチェンジしなくても。それに水道水だろー。と、マスターは言いたい気持ちを強く押さえ込んだ。エナは俺に喜んでもらおうとしてくれているのだから。ただ、その妖精姿は、嬉しくもエナの肌が透き通って見えるゆえに男としての興奮を覚えた。

その興奮をなんとか頭の隅に追いやり、午後はエナの言うモフモフタイムだ。単にゲームを一緒にするのだ。二人でできる対戦ものが中心。パズル、格闘、ボード系。ゲームによってエナはドレスチェンジをする。それによって能力をアップさせることができるらしく、勝負はいつも白熱する。

パズル戦は、白衣を着た女医。しかも、大人なお姉さんで妖婉さを醸し出して、マスター自身がドギマギする。

格闘ゲームはテニス選手姿。ヒラヒラの短いスコートで隣に正座などされれば、画面の他に視線が向かわないわけがない。

ボードゲームは園児姿で、男の気も知らずわざとじゃれ合ってくる。これら全てゲームに勝つ心理作戦なんじゃないかと俺は思っている。

しかし、ベタな横スクロールのアドベンチャーゲームが、特にエナは苦手である。次々と流れてくるアクションを把握しきれないようだ。普段からは想像し難いほどに不機嫌になるので、もうやらなくなってしまった。俺だって、エナの楽しんでいる表情を見ている方がいい。でも、たまには違う刺激を味わってみたい時もないわけではない。

「そろそろ、夕飯の買い出しに行くか」

陽は傾き始め、干していた洗濯物は気持ちいいほどに乾き、布団と抱き枕はいつになくふかふ

かになっていた。いつの間にかいなくなっていたエナがマスターの目の前に現れると、

「マスター。準備ができました。お供しましょう！」

帯剣した女戦士が片膝をついた。

「いや、違うから。肉食モンスターの討伐とか、狩りをしに行くわけじゃないからよ」

マスターはその姿を見てすぐに言い放った。まるで、俺にそう言わせるかのようにタイミングがばっちり合っている。

「私では力不足でありますか？ マスター……」

「力不足とかそういう問題じゃなくて、そんな剣を携えて歩いていたら捕まるって……。はい、ドレスチェンジ！」

結局、エナはメイド服で買い物に行くことになった。行き慣れた商店街とスーパーをひと回りするだけだ。マスターの半歩後ろを歩くエナは前から人が来ると、バツとマスターをかばうようにして壁になる。

「マスター、ここは私が……」

冷静な面持ちで相手の様子を伺う。マスターはエナの頭を軽くチョップする。

「イタッ！」

「まだ戦士の性格、抜けてないぞ。今の自分の姿をってみろよ」

「えっ！ あっ！ 大変失礼いたしました、マスター。出過ぎた真似をして申し訳ありません……」

エナは頭を下げ、身を小さくしてマスターの半歩後ろへ下がった。時折、ドレスチェンジしたあと前の性格を継承してしまう時があるエナ。たびたび器用に切り替わる姿に感心する一方で、壊れたロボットのように見せるエラーが俺の心を和ませる。そこがまた可愛い。

夕飯は二人で作り、穏やかな食事の時間を過ごした。その後、猫のようにすり寄ってくるエナと戯れる。無論、そのエナは猫そのものであり、シッポも生やしている。またゲームの続きなどをして誰にも邪魔されない二人のささやかな時間を過ごした。そのまま眠ってしまわないうちにマスターは風呂に入った。背中を流しに来るエナには、スクール水着を要望したことだけを付け加えておく。

すっかり辺りは静かになり、一日干した布団からは太陽の匂いもして気持ちがエナのことではいっぱいになる。自然と笑みが浮かぶ。ふっくらした抱き枕には、大胆にはだけたパジャマ姿に顔を赤らめた表情でマスターを見つめるエナがプリントされている。ふかふかな抱き枕を抱きしめてしまうには、少しもったいなさも感じつつも、欲望を満たすようにいっきに抱きしめて顔を埋めた。エナに匂いが広がった。脳裏にエナの姿が浮かんでは消えて行く。

――エナ、大好きだ。

部屋の電気は消され、薄闇の中。

「「「 マスター、夢の中で逢えるかしら。おやすみなさい。また明日、目覚めのベルとともに私たちが思い起こして下さいね 」」」

部屋の片隅にある棚にエナの立像がいくつも並んでいた。透明なアクリル板の向こうからこっちを見ている、人の想像が形となりしモノ。現実的にある衣装をまとったものから、ファンタジックでデフォルメされた形状のものまで。

「「「 ここにいる限り、私たちはマスターのコレクションですから 」」」

マスターコレクション

<http://p.booklog.jp/book/75303>

著者：水島一輝

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mizu-c/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75303>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75303>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ